

「災害と文学」展 開催中

今、浜松文芸館では収蔵展と併行して「災害と文学」展を開催中です。この企画は全国文学館協議会からの共同展開催の呼びかけに応じたもので、災害を題材とした書籍や自筆原稿、皆様からお寄せいただいた俳句・短歌作品などを展示しております。文学が天変地異をどう表現してきたか、ご覧いただきたいと思ひます。

【主な展示品】

- 鷹野つぎ自筆原稿・・・「震災記」
- 〃 執筆資料・・・「震災当時」「子供に悲惨事を語るな」「天災の価値」等
- たかはたけいこ著「3・11備忘録」「彷徨、新生。」
他
- 「浜松市民文芸」58集市民文芸賞「背をはれて名月」
- 市民投稿作品・・・俳句、短歌



文芸館の四季

気象番組を聞いていると、その時季に応じて「桜前線」とか「紅葉前線」などという言葉が聞かれ、日本列島の季節の移ろいを草木花で知らせてくれる粋なはからいに風情を感じています。



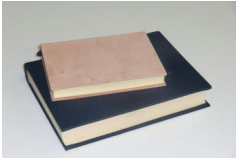
そんな花だよりに合わせて「いざない」の発行をしなければと思いつつも、つつい出しそびれているうちに、桜前線はかなり北へ上ってしまいました。文芸館の桜も疾うに盛りを過ぎて、はや新緑の葉が生い茂る頃となりました。今年の桜は殊更性急に咲き、そして散っていったように思われます。

そう言えば、ちょうど文芸館のソメイヨシノが満開の頃、ラジオの朝の番組で、「今年のソメイヨシノは花卉の色が白いのでは？」という司会者の問い掛けに対し、気象予報士の回答の中に、「見る人が歳を重ねると受ける紫外線の程度で云々・・・」という内容の言葉がありました。

私自身、今年の桜は心なしか色が薄いように感じていただけに、ショックを受けました。皆様の目にはどのように映ったのでしょうか。

お知らせ

- 4月の抽選日は、月末の30日が休館日なため、29日(月)の実施となりますのでお間違えのないようにお願いします。



浜松文学紀行 16

二俣 — 山本周五郎「武家草鞋」

戦時中の昭和18年、40歳の時、「日本婦道記」が第十七回直木賞の候補に推されるがこれを辞退したことなどで、「曲軒」と称された山本周五郎に現浜松市北区二俣を舞台にした小説がある。昭和23年6月、操書房刊「松風の門」収録の短篇「武家草鞋」である。現在CD文庫に入っているので図書館で容易に借りることができる。

少年の頃から清廉潔白を何よりの信条として生きてきた青年武士宗方伝三郎は、周囲から偏狭、傲慢な独善家と揶揄され罵られた。藩の家督問題をきっかけに主家を退身、各地を浪々するが、世間はどこも卑俗で彼の生きられるところではなかった。疲労困憊して倒れ伏していた彼を救ってくれたのは、村人たちに「西の老先生」と尊敬されている老人とその孫娘だった。昏々と眠っていた伝三郎が目覚めたのは次の日の暮れ方だった。娘に案内されて家の裏に出ると、

若杉の垣の向うはうちひらけた段畑で、その畑地の果てるかなたには、狭間はぎまに夕雲のわき立った重畳たる山々が眺められる、垂れさがった鼠色の雲にはもう残照もなく、耕地も森も、薄の白く穂立った叢林も、黄昏のもの哀しげな光に沈んで、しずかに休息の夜の来るのを待っているようにみえる。なんというしずかさだろう。伝三郎は切なくなるほどの気持ちで心の内にそう呟いた。(略)「いちばん手前にある低い山のずっと左の端に、こんもりと木の繁った小高い処が見えますでしょう、あれが二俣のお城でございます」

この城で理不尽な最期を遂げた岡崎三郎信康の悲運を、伝三郎はわが身に重ね合わせるのであった。二俣の豊かな自然と、かつて彼が経験したことのないこの家の老人と孫娘の善意と愛情に包まれて、伝三郎の心と体は徐々に回復していくかにみえた。しかし、純朴と思われたこの山村の「世間」も、やはり彼には容認できぬ俗悪なものだった。頑丈な彼の作った草鞋を、儲けのためにもっと弱く作れという問屋の主人や、そんなに働かれると困ると抗議する土方の人足仲間、山葡萄の一粒に手を伸ばそうとした途端、刺々しい声で「山を荒らすな」と叫んだ年頃の村娘らに出会い、「こうした汚れた世間に生きていく力には自分にはない」と再び旅支度にかかった。しかし、「他人を責めるばかりで、一度も自分を責めたことはない。それでいいのか」と老人に諫められはっと己の非にも気付いた時、主命を受けて彼を探していた藩の同僚が頑丈な武家草鞋を手繰って彼の所在を探り当てて来た。

戦時中山本は疎開もせず、すい臓がんが悪化する妻と乳飲み子の世話をしながら書きつづけていた。主人公には作者の自画像が色濃く投影しているようだ。結末の明るさは、一人奮闘する山本を見かねて病人の介護を買って出てくれた近所に住む吉村きんの献身と彼女の人柄が反映しているものと思われる。21年山本はきんと再婚している。